

Glocal Tenri



2

月刊 **グローバル天理** Monthly Bulletin Vol.14 No.2 February 2013

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- 巻頭言
寒月を見る…
／深谷忠一…………… 1
- 天理教海外伝道の資料 (36)
満州伝道関連史料⑩
／深川治道…………… 2
- 天理教伝道史の諸相 (14)
鳥取と島根の天理教
／早田一郎…………… 3
- 「おふでさき」の有機的展開 (10)
第二号：第一首～第十二首
／深谷耕治…………… 4
- フランスで育つ日本人の子供たちへの
日本語教育 (2)
天理日仏文化協会こども日本語講座の
取り組み②
／田中久代…………… 5
- 「いのち」をつなぐ一生死の現象 (14)
死をどのように考えてきたのか⑤
／堀内みどり…………… 6
- 「鬘のあわいに深く入り込んでいて…」
をめぐって (7)
鬘のあわい——その火口⑦
／松田健三郎…………… 7
- ノーマライゼーションへの道程 (12)
障害当事者運動とまちづくり②
／八木三郎…………… 8
- 天理参考館所蔵の漢族資料 (4)
玩具①
／中尾徳仁…………… 9
- 世界平和のための宗教対話 (36)
ヴァチカン便り
／山口英雄…………… 10
- 図書紹介 (73)
『識字神話をよみとく 「識字率 99%」
の国・日本というイデオロギー』
／堀内みどり…………… 11
- English Summary…………… 12
- おやさと研究所ニュース…………… 13
第 255 回研究報告会／『グローバル天理』合本
のご案内／現代社会と信教の自由・公開講座参加／
台湾出張報告／第 59 回現代における宗教の役割
研究会 (コルモス) 研究会議に参加／平成 25 年
度公開教学講座開催のお知らせ

巻頭言

寒月を見る…

おやさと研究所長 深谷忠一 Chuichi Fukaya

“寒月”という季語があるように、この時期の寒空に映る月の美しさには、格別なものがあります。“さやけき”と言われる秋の月に比して“すさまじ”という形容詞が使われますが、磨ぎ澄まされた名刀のような輝きを放つ冬の月には、誰しもが身の引きしまる感をもつのではないのでしょうか。

さて、この夜空に見える月は、地球からすれば一番近い星ですが、それでも 38 万 km (国際宇宙ステーションは地上 400 km) も離れています。それが太陽になると、地球から 1 億 5 千万 km。そして、それが恒星になると、一番近くの星でも 40 兆 6 千 780 km も離れています。有名な七夕の彦星は 151 兆 3 千 6 百億 km、織姫星は 236 兆 5 千億 km も遠くにある星なのです。

そして太陽・地球や七夕の星がその中にある天の川銀河の端から端までを計ると、なんと 47 京 3 千兆 km もあり、さらには、天の川銀河から隣りの銀河までは、2 千 175 京 8 千兆キロ (光速の宇宙船でも 230 万年もかかる距離) もあるのです。そして、宇宙の中にはそのような銀河が 1 千億もあって、その銀河の中にまた 1 千億くらいの星があるといわれているのです。

この想像を絶する宇宙の雄大さ、精緻さを知れば、人間など本当にちっぽけなものに感じられます。しかし他方、そのちっぽけな人間が、自分達が行ったこともない、否、その距離の遠大さから絶対に行くことができない銀河や星を観察して、宇宙の様子を (多少なりとも) 知っている。これもまた、奇跡とも言わなければならないことだと申せましょう。

理屈っぽく申せば、そのものがそこにあることが分かる存在、それを美しい・素晴らしいと感じる人間がいればこそ、星や銀河はその存在意義を増すのです。宇宙の生成ということの上からは、人間が認識できないダークマター (暗黒物質) やダークエネルギー (暗黒エネルギー) も存在する必然性があるのですが、それもまた大きな意味では、人間存在を可能にする宇宙を我々が認識するがゆえに、その存在意義が生じるのだと思うのです。もっと卑近な例で申せば、美しい女性が

素晴らしい衣装で着飾っていても、彼女が一人で無人島に住んでいるのでは、あまり意味がありません。彼女の美しさを賞賛・賛美してくれる人たちがいてこそ、彼女の美しさの値打ちが出るといえるのです。何万光年のかなたの星に、富士山より雄大で美しい姿の山があったとしても、誰もその山を愛でる人がいなければ、その山はただそこに物理的に存在するだけなのです。

つまり、星たちを美しいと思い、雄大な宇宙にロマンを感じる人間がいてこそ、星も宇宙も存在する意味が確かになる。ですから、親神が“知恵と文字の仕込み”をされた一人間に事物の存在を見聞きし認識する能力を与えられた—ことは、単に“他の生き物より優位に立つ”ということ以上の大切な意味があるのです。“だから宇宙は奇跡に奇跡を重ねて人間を作った”と、最近の哲学者や科学者は言うのですが、その宇宙の意思を我々に鮮明に感じさせるのが、寒月のすさまじき美しさだと思うのです。

また、話は変わって、明治 19 年 2 月 18 日から 12 日間、無理矢理の違警罪を罪科に、天理教教祖は 89 歳のご高齢の身にもかかわらず、30 年来という厳寒の中を、樺本警察分署に引致・収監されました。天理教者は、それを“教祖のご苦勞”といい、その“ひながた”を偲び、その後を辿ろうとするのですが、時代背景の違う今では、それは容易なことではありません。たとえば、現今の留置所・刑務所は、部屋でも冷暖房完備が当たり前で、冬の寒さを凌ぐために自ら罪を犯して入牢したいという人がいるほどですから、教祖伝で語られる“ご苦勞”と全く同じ体験をすることはほぼ不可能なのです。

しかし、その中、夜の寒空を見上げ、月の美しさに心震わせることだけは、唯一実際に教祖と同じ体験ができるのです。寒月のすさまじき美しさに神の創造の業の深遠さを感じ、また、その月の清らかさに教祖の清廉・孤高なお姿を偲ぶ…。

寒さに怖気づいて炬燵で惰眠をむさぼる身を叱咤激励するためにも、時には外に出て、澄みわたる冬の夜空を見上げることが大事だと思っている次第です。